

神奈川支部情報

第23号 発行日 2011年10月1日

<発行者> 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

郵便振込口座 00190-2-114578

9月25日、第11回神奈川証言集会を開催しました。絵鳩毅さんは98才、迫力いっぱい、たっぷり90分の証言間の証言でした。皆さんからの質問にも応えてくださいました。

「絵鳩さんの完璧なまでの記憶力に脱帽。そしてその帰国後の一貫した姿勢に脱帽です」とアンケートに書かれていました。まったくその通りの証言でした。戦争で4年、シベリア抑留5年、さらに撫順戦犯管理所で6年、28歳から43歳まで、人生のど真ん中の15年間を『棒に振った』絵鳩さんですが、『せめて最後の6年間を撫順戦犯管理所で過ごせたことはなにものにも代えがたい貴重な体験であり、感謝している』（『内は絵鳩さんの手記より）

つねづね絵鳩さんは、侵略戦争に参加して中国人民を蹂躪してきたことの反省を、事実をもって示すのは帰国後の生き方にあるのだ、と。その帰国後の生き方を初めて語ってくれました。

帰国した戦犯の55年

～「中帰連」会員として何をしたか～

はじめに

私は、いま藤沢市に住む98才の老人ですが、過去まだ夢の多い青春時代を日中戦争にかり出されたうえ、敗戦の年の6月、陸軍伍長のときに大隊長の命令に従い、教育中の初年兵30名に中国人捕虜4名を交互に刺突させるという戦争犯罪を、犯してしまいました。敗戦後はシベリアに抑留されましたが、その罪を問われて、シベリア抑留5年後に中国に送還され、撫順戦犯管理所で6年間の拘禁生活を送りました。この15年にわたる私の戦争体験については、いままでこの会場でもなん回か話してきましたので、今日は話題を変えて帰国後における私の後半生について、それを「中国帰還者連絡会」（略称・中帰連）との関わりに焦点を当てて、さらに前期と後期に分けてのべてみたいと思います。

① 前期は、帰国後高校教師や特定郵便局長を務めていた27年間です。

とくに郵便局長時代は、「中帰連」には会費を納めるだけの名ばかりの会員であり、会の分裂後は怒りと失望とで分かれたいづれの組織にも属さない「脱落分子」となりました。

②後期は、「中帰連」に復帰後、常任委員長として会の運営にあたりました。そして会の解散後は「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」の特別会員として活動している現在までの28年間です。

絵鳩 毅さん(98 才)の第 3 作目の冊子

「皇軍兵士の 4 年」～カント学徒、戦犯に堕つ～

を当日発刊しました。

第 1 作「撫順戦犯管理所の 6 年」

第 2 作「シベリア抑留の 5 年」

も発売中です。(各冊 1 部 400 円) ぜひ一読をお勧めします。

希望者は本紙発行者(松山)までメール、また FAX(1 ページ参照)で、<〒、住所、氏名、電話番号、および希望冊子ごとに冊数>を書いて申し込んで下さい。振込用紙を同封して、お送りします。

*「撫順戦犯管理所の 6 年」は残り少なくなっています。

第 I 部 後半生前期の 27 年

～43 歳から 70 歳まで～

(I) 起訴免除～即日釈放

中華人民共和国が、昭和 31 年 6 月から日本人戦犯に対して行った軍事裁判は、きわめて寛大でした。1,062 名中わずか 45 名が裁判にかけられましたが、死刑も終身刑もなく、最高刑でも 20 年の禁固刑でした。だが、この刑期のなかには戦後すでに経過していた 11 年が算入されており、8 年後の昭和 39 年 3 月までに、死亡者 1 名をのぞく全員が無事に帰国しました。

残りの戦犯は、「起訴免除～即日釈放」となりました。その判決を受けたときは全員が号泣しました。発言を許された者は、全員を代表して

「後半生は必ず平和と日中友好に捧げます」と誓いました。そして、1 ヶ月もの中国国内各地の参観旅行を許されたあと、昭和 31 年の夏、3 班に別れて帰国の途につきました。私も最終班の一人として、再びなつかしい祖国の土地を踏むことができました。28 才で軍隊にとられた私は、そのときすでに 43 才になっていました。

(II) 舞鶴港にて

昭和 31 年 9 月 5 日、私たち最終帰国組 354 名を乗せた「興安丸」は、波静かな舞鶴港に入港しました。15 年ぶりに見るなつかしい祖国

です。だれもが狂喜して、われ先にとボートに乗り移って上陸を争いました。私は最終ボートに乗り、しかも最後の上陸者となりました。冷静だったはずの私も、出迎えてくれた（自分の）婚約者を、弟の嫁と間ちがえてしまいました。

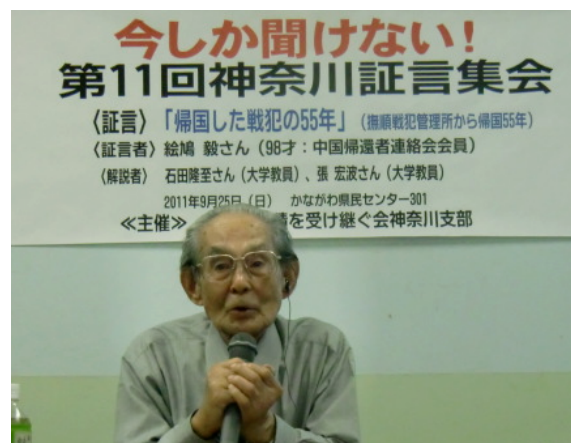
導かれて入った「舞鶴引揚者寮」は、みすぼらしく、大広間の畳は波打っていました。ここで、私たちに支給されたものは、戦争末期の粗悪な軍装一式と帰還手当＝1万円（交渉の結果2万円）だけでした。

帰国組第1班は、ここですでに「愛する祖国と懐かしい同胞の皆様へ」というメッセージを発表し、日本国民と共に祖国の独立と平和のために奮闘する決意と、暖かいご援助を賜りたいという願いとを表明していました。だが、私たちの帰還を報道した「朝日新聞」は、「最も手強い中共の洗脳組が帰国した」と書かれました。その上、私たち千名全員が警察の「ブラックリスト」に載せられ、つねに監視を受け、また社会からも「白い目」で見られたのでした。そのために多くの仲間が就職難に苦しみ、「ニコヨン生活」に追いやられました。

（Ⅲ）長野県上田染谷丘高校教師 の3年半

私は帰国すると結婚して東京の杉並に新居を構えました。また私の場合は幸い戦前に勤めていた学校が新制高校の上田染谷丘高校と名前も変わっていましたが、元の職場に

復任できました。



学校に復任する前の10月14日、管理所時代の「文化工作班」が中心となって「中国戦犯帰国記念文化公演」を「東京千代田区公会堂」で開催し、ソ連や中国で習い覚えた合唱、舞踊、器楽演奏などを披露して、われわれの存在を国民にアピールしました。私も出席して感動を新たにしたところです。

この年の11月、長野県上田染谷丘高等学校の社会科教師として復任した私は、その復任式の挨拶で過去戦争に加担した自己を詫び、今後は平和と社会の進歩に少しでも役立つ人間になりたい、おたがいに真面目に学習しましょうと訴えました。

また各クラスのホームルームに招かれては、戦争やシベリア抑留での体験、とくに中国で受けた人道的待遇などを語りつづけました。どのクラスの生徒も皆真剣に聞いてくれたので、これが私の生きがいでありました。感想文を寄せた各クラスの90%が反戦平和への願いを表明しておりました。

あるとき、学校の放送班の依頼を

受けて昼食時に「新中国の人間像」と題して全校放送しましたが、そのなかで戦時中、日本からうまい水を軍用機で運ばせていた日本軍の某師団長と「万里の長征」時に負傷兵に自分の乗馬を与え、自らは歩きつづけた毛沢東とを対比するなどして、「人民服務」の思想に貫かれた新中国の優れた人間像を紹介しました。しかしそのことが職員たちにショックを与え、私はマークされる存在となりました。そして、やがては長野県教育委員会から抜き打ちの授業査察まで受けるようにもなりました。その後、私は主に家庭の事情により昭和35年3月に「依願退職」しました。

(Ⅳ) 2年間の浪人時代

上田染谷丘高校を退職した私は、まず自宅の増築をしながら就職運動に明け暮れました。多くの友人や知人の手を借りましたが、「中共帰り」はどこも受け入れてくれませんでした。また、東京都や千葉県の教員検定試験も受験しましたが、長い間社会から隔絶されていた私は、当時の日本の事情に疎かったために何れも落第でした。

最後に、旧制高校の先輩が校長になった新設の淵野辺高校に拾われました。だが、そこには生徒は3名しかいませんでした。ここで1学期勤めたあげたころ、郵政省に勤めていた妻からの情報にもとづいて藤沢東海岸郵便局長への転身を決意しました。

このとき浪人期間はわずかでしたが、東京にいましたので「中帰連」との接触の機会がもてました。「東京都連合新年会」に出席したあと、富永正三君に誘われてともに会報「前へ、前へ」の編集に携わりました。また、同誌に「私の反省」と題する自己批判文も掲載しました。

(Ⅴ) 藤沢東海岸郵便局長時代 ～「中帰連」の名目会員から脱落分子へ～

私は昭和36年12月8日、局長が罪を犯して欠員中の「藤沢東海岸郵便局長」に任命されて、19年7ヶ月勤務し、68歳で定年退職いたしました。

私は、住いを藤沢市鵠沼の借家に移すと、まず自宅兼郵便局舎の建設を進めながら、郵便局長としての研鑽に力を注ぎました。翌年4月、自局が完成すると、郵政省から転勤した妻とともに、窓口接遇の向上、業務成績の向上等々に全精力を傾けました。それにより、定額貯金の募集成績は初年度の44倍に、また郵便切手の売上高も初年度の20倍に引き上げることができました。社会の福祉にいささかでも貢献できるこの職業にかけた人生に、悔いはありませんでした。だが、「中国帰還者連絡会」の会員としては、ただ会費を納めるだけの「名目会員」とどまり、昭和42年2月会の分裂以降は、怒りと失望とで、分かれたいずれの組織にも参加しない「脱落分子」に堕してしまいました。

① だがこの間、わが「中帰連」は一貫して、侵略戦争に反対し、日中友好に貢献する活動をつづけておりました。具体的には、まず日本国民に大きな衝撃と覚醒を与えた図書「三光～日本人の中国における戦争犯罪の記録」の出版、安保闘争への参加、日中国交回復国民大運動への呼びかけ、中国殉難烈士（強制連行の後犠牲になった人たち）にいの遺骨送還、中国強制連行者名簿の作成、中国訪日団の歓迎、等々です。

② 昭和41年10月、日本と中国の友好協会代表団が発表した「共同声明（ベトナム支援の国際統一戦線の結成について）」をめぐり、日中友好協会が賛成の社会党系と反対の共産党系に分裂すると、その影響下にあったわが「中帰連」もまた分裂して、社会党系グループが「中帰連（正統）」と、共産党系グループが「中帰連」となり、以後20年間は、たがいをやれ「反中分子」～やれ「中国一辺倒分子」と攻撃しあう仲となりました。

③ 「中帰連（正統）」は、この間、反米・反軍国主義運動を継続するとともに、とくに日中国交正常化のための運動に力を注ぎました。

④ 他方、日中友好交流から事実上締め出された「中帰連」は、テレビ、ラジオ、雑誌を通じ、とくに図書の発行により反戦平和活動に力点をおきました。この期間中に、組織の会員が発表した著書は十数点にのぼりましたが、とくに「新編三光」はベストセラーとなり、25万部を売り

上げました。

⑤ ともあれ、分裂した二つの組織は、第2回全国大会で定めた会則第2条の「侵略戦争に反対し、平和と日中友好に貢献する」という、会本来の目的を守り、活動していました。当時はたがいに攻撃しあう関係でありましたが、それはたがいは「敵」ではなく、ただ日中友好に関する視点と活動方法とに差別があったにすぎませんでした。

（Ⅵ）定年退職後から会への復帰まで

① 自叙伝」の執筆～昭和56年6月、68歳で郵便局長を定年退職した私は、以前から心に決めていた「自叙伝」の執筆にとりかかりました。四六時中家に閉じこもり、1年あまりで幼年時代から帰国するまでの前半生を書きあげました。後にこれを喜寿の記念に「大正から昭和へ」（4巻）として自費出版しました。

② 「新編三光出版記念集会」に出席～自叙伝を書き終えて、「さて、次は？」と考えていたとき、「中帰連」の富永正三君からの通知を受けて、昭和57年10月、東京上野で開催されたこの「新編三光出版記念集会」に出席して、強い感動を受けられました。この集会には、組織の別を問わず多くの会員が出席していて、彼らと握手を交わすだけで、たちまちにして管理所時代の強い友情が甦りました。会を分裂させた指導者たちに対する憤懣から会を離脱している私は、中国人民と活動をつづける会員たちに対して申しわ

けなく、慙愧に耐えませんでした。
そしてこれが、会へ復帰する動因と

なり、私の後半生での大きな転換点
となりました。

Ⅱ部 後半生後期の28年 ～70歳から現在まで～

(Ⅰ)「中帰連」(正統)へ復帰する
その翌昭和58年4月、栃木県鬼
怒川温泉で「中帰連正統・第5回全
国大会」が開催されました。私も
誘われて参加しました。この大会
では、①組織の統一、②元管理所職
員の日本への招待、③「撫順戦犯管
理所回想録」の出版などが当面の活
動方針とされたので、私の心を強く
動かし、正統組織に復帰することを
決めました。私はちょうど70歳で
した。

(Ⅱ)統一への始動から統一まで
やがて両組織の間で、かつて中国
でお世話になった戦犯管理所の先
生(元職員)方を共同でご招待する
案が浮上し、両組織ともこれに合意
しました。



当日、発言中の絵嶋さんです

① 昭和59年10月、「撫順・太原
戦犯管理所元職員代表訪日団」(団
長金源先生以下8名)の招待が実現

すると、東京・仙台・大阪・広島な
どの歓迎会場には、総勢600余名
の会員が歓呼して参加し、28年ぶ
りの劇的な再会をはたしました。私
も東京会場に出席して、先生方の宿
舎係をつとめました。

この行事を取材したマスコミは、「
かつて銃火を交えた敵対者、後には
戦犯とその管理者であった者同士
が、どうしてこのような友好関係を
結べるのか」、理解できませんでした。
た。

代表団の帰国後、会は感想文を募
り、それを「28年ぶりの邂逅」とい
う小冊子を作り全会員に配布いた
しましたが、私もこそその編集に加わ
りました。

②「統一促進委員会」の結成～管理
所職員の招待行事の成功は、両組織
の距離を一段と縮め、やがて「統一
促進委員会」(両組織とも5名ずつ)
を発足させると、私も「正統」代表
の一人に選ばれ、以来1年有半にわ
たる折衝の結果、最終的には「認罪」
の原点に立ち返り、統一への合意を
勝ちとることができました。

③そして昭和61年10月、熱海温
泉で「統一第1回全国大会」を举行
し、20年になんなんとする「分裂」
に見事終止符を打ちました。「覆水

盆に返らず」の社会通念をうち破り、会がみごと統一を勝ちとることができたのも、中国の管理所での人道的待遇のなかで把握した「認罪」という深刻な共通体験があったからにほかなりません。

この統一全国大会」には、全国か90余名が参加し、私は会の司会をつとめました。ここで新たな会則が制定され、また富永正三・大河原孝一の両名が代表委員、私を含む13名が常任委員に選出されました。

（Ⅲ）統一直後・2年間の活動状況

① 「中帰連統一代表訪中団」の派遣～またこの大会では、富永団長以下8名の訪中団が編成され、私も加えられました。団は、「中国国際友誼促進会」や「撫順戦犯管理所」との間で今後の友好交流について協議しました。

② 翌昭和62年4月、会は管理所の要請により、会の活動資料22梱包、450点を、東京で贈呈式を行いました。私はその主な任務を担当しました。

同年10月、「私たちは中国で何をしたか」（元日本人戦犯の記録）と題して「三一書房」より3版6千部を発行し、好評を得ました。私ものこの編集に参加しました。

③ 昭和63年4月、会は会員のカンパによる1千万円相当の炊飯機や什器などを撫順市の「桜花飯店」に寄贈し、その開店式典に22名の代表団を派遣しました。

④ 統一した会は、この2年間に、10の訪中団を中国に送り、また中国より4つの訪日団を迎え歓迎することができました。

（Ⅳ）常任委員長としての10年間の活動状況

昭和63年10月、会は管理所の陳毅所長と呉浩然顧問をお招きして、愛知県の内海温泉で「統一第2回全国大会」を開催しましたが、ここで新たに会長に富永正三、副会長に大河原孝一、常任委員長に私・絵鳩毅、事務局長に高橋哲郎が選ばれました。

以降10年間、私は常任委員長として会の運営、すなわち月1回の開催の「常任委員会」、隔年ごとに開催される「全国大会」と「全国委員会」の運営に力を傾注しました。この運営にあたり私は、つねにこう心に決めていました。「統一したこの会を再び絶対に割らないこと」、また「会の目的である侵略戦争に反対し、平和と日中友好に貢献する活動を一段と強化すること」でした。以下この10年間における会の主なる活動を、活動分野別に、そしてそれを年代順にのべさせていただきます。

第1節 侵略戦争に反対し、平和を守る活動

会が統一を果たすと、全国支部の会員たちによる戦争証言活動が一段と強化され、その回数は枚挙にいとまありませんので省略し、ここでは、会の本部が中心となって活動した主なるものについてのべます。

① 謝罪碑」の建立立

昭和63年12月、会は中国政府の許可を得て、管理所の前庭に、高

さ61余の大理石の謝罪碑を建立し、「抗日殉難烈士に謝罪の誠を捧げ、再び侵略戦争を許さぬ平和と日中友好の誓い」を刻みました。この開幕式典に会は19名の代表団を送りました。

② 昭和天皇の戦争責任を問う活動

昭和天皇の病状が悪化するにつれ、日本のマスコミは天皇を美化する風潮をかもしはじめたので、会は、統一第2回全国大会で「昭和天皇の戦争責任を問う決議文」を採択し、翌平成元年1月に会の声明として公表しました。そして、また「天皇の国葬を許さない2・23集会」にも参加し、さらにこれに呼応して、2冊の図書「天皇の軍隊」と「侵略」とを出版し反響を呼びました。

③ 自衛隊の海外派兵に反対する活動

会は平成2年10月に、「PKO法案の撤回を要求する声明」を発表し、翌3年1月には「湾岸戦争への自衛隊派遣に反対する声明文」を、首相、各政党、マスコミ、友好団体等に郵送したり、また友好諸団体と数回にわたり反対集会を開催したりしました。

④ 従軍慰安婦問題についての証言活動

会は、平成4年8月、西野留美子氏同席の下、「従軍慰安婦についての証言・学習集会」を開催しました。ここで会員が証言した全内容は、同氏の著書「従軍慰安婦と15年戦争」(明石書店)のなかに収録されまし

た。

⑤ 731部隊展示会」への積極的参加

この展示会は、平成5年4月から2年間、61の都市で開催され、23万人の入場者を数えましたが、そのほとんどの会場で、わが会員がその運営と証言活動とに積極的に参加しました。

⑥ その他の活動

会はまた、平成元年以降「不戦兵士の会」など友好4団体と協同して、毎年「7・7記念集会」、「8・15記念集会」、「12・8記念集会」を開催したほか、「真珠湾攻撃50周年記念集会」、「戦後50年記念集会」、「遺棄毒ガス弾を考える会」などにも参加しました。

第2節 日中友好のための諸活動

会が統一を果たしてから、会の活動目標の主軸である日中友好の諸活動も、飛躍的に発展をとげました。

① 中国での図書出版への協力

★ 平成2年1月、会は管理所の依頼を受けて「中帰連30年の歩み」を、富永、絵鳩、三尾の3名で共同執筆して郵送しましたが、これはやがて北京で出版された図書「世界を震撼させた奇蹟」の付録として収録されました。

★ 翌平成3年6月、撫順市政教文史委員会の依頼により、私は「中帰連訪中団の記録」を収録して郵送

しましたが、後これにより、「難忘的中国」なる図書が出版され、その贈呈式が東京で挙行されました。

★ また、同年同月、北京で出版予定の写真帖「覚醒—日本戦犯の教育改造の記録」について、私と山中常任委員とで新しい資料を提供し、また一部の校正もしました。さらに、会としてこの出版への資金援助もしました。

②会が組織した訪中団

会の創立以降 30 年間に、会が組織した訪中団はわずか 8 回で、参加人員も 75 名にすぎませんでした。統一後の 10 年間に派遣した訪中団は、21 の団で、参加人員は 292 名に達しました。

私個人としては、統一以後 3 回、会の訪中団に参加しましたが、第 1 回はすでにのべた統一直後の代表訪中団でした。

★ 2 回目は、平成 5 年 10 月に組織された「93 中帰連友好訪中団」（団長富永、副団長私以下 50 名）の最大規模の訪中団でした。この団は 10 日間にわたり、北京・瀋陽・撫順・西安・上海・杭州などを歴訪しましたが、とくに意義深かったのは、撫順管理所で、団長とともに「謝罪碑」に献花したあと、お世話になった先生方 45 名をご招待し、37 年振りの再会を果し、心からの感謝の誠をつくすことができたことでした。帰国後、私は団員の感想文を集め 1 冊の「記念文集」を出版しましたし。

★ 3 回目は、平成 9 年 5 月、私と高橋哲郎君の両夫妻 4 名が「中国国際友誼促進会」より招待を受けた訪

中団でした。私たちは 5 日間、故宮、景山公園、頤和園などの観光のほか、「中国人民抗日戦争記念館」や「南京虐殺 60 周年記念展示会」などの参観も許されましたが、とく後者の会場では、中国中央テレビ局の取材を受けた際、南京事件での被害者と対面し、私は日本国民を代表して深く謝罪いたしました。このときの映像は、即刻全中国に向け放映されたと聞きます。

③会が招待した中国の訪日団

会は発足以来の 30 年間に、中国各界からの訪日団を 13 回にわたりその歓迎行事に参加してきましたが、自主的に招待したのは、統一直前の「撫順・太原理所元職員代表訪日団」だけでした。だが、統一すると会は、自主的に中国からの訪日団をご招待するようになり、撫順戦犯管理所、中国国際友誼促進会など 4 団体の代表団を 20 回ご招待し、その人員は 59 名でした。そしてこの各団は、いずれもわが会の行事への参加、各地の観光だけではなく、日本の各種民主団体との交流につとめられました。

第 3 節 広報・出版活動について

①テレビでの放映

★ NHK スペシャル「戦犯たちの告白～撫順戦犯管理所 1062 人の告白」～平成元年 8 月 15 日、NHK は上記の番組を、ゴールデンタイムに、1 時間 50 分にわたり、全国放送しました。会が取材に全面的に協力したこの番組は、120 万人の日本国

民に衝撃的な印象を与えました。この番組には 10 名の会員が管理所で書いた犯罪手記の内容と今の心境とが映しだされただけでなく、わが会員 3 名が、中国の現地を訪れ、被害者たちに対面して謝罪する映像も組みこまれました。

視聴者から寄せられた数多くの感動的な感想文は、すべて会に届けられましたが、その 1 例をのべますと、

「昨晚はNHKスペシャル「戦犯たちの告白」ありがとうございました。・ ・ NHKとは思えないシッカリした主張があり、感動しました。1062 編の手記の出版を祈らずにはいられません。このまま終わるのはもったいないと思います。とにかく私が人生で出会ったNHK番組の中でNo.1 でした！」(東京杉並区、女性)

なお、この番組は、視聴者の要望に応じて年内さらに 2 回再放送され、また「90 年地方の時代賞映像作品優秀賞」を獲得しました。

★日本テレビ放送「ある戦犯の謝罪～土屋元憲兵少尉と中国～」

会がその取材に全面的に協力したこの放送は、平成 2 年 8 月 18 日、40 分間深夜放送されましたが、多くの反響を呼び、この制作を担当した山形放送により再放送されました。また「91 年地方の時代賞映像作品優秀賞」も獲得しました。

このなかで、会員土屋芳雄は過去自らの手で殺害した張永興烈士の 4 女である張秋月夫妻と面会し、その前に身を投げ出して謝罪しました。

②出版活動

出版活動は、また、会発足以来の重点活動目標でありましたので、統一前でもすでに「三光」(5 万部)、新編三光」(25 万部)など 10 数編の出版をしていますが、統一後も先にのべた「私たちは中国でなにをしたか」「天皇の軍隊」「侵略」を加えています。以下はそれ以後の出版活動について補足いたします。

★ 平成元年 6 月には、日本社会主義センターの依頼を受けて、その機関誌「進歩と改革」に、「侵略～体験と反省」と題して私も含む会員 13 名の新たに執筆した戦争証言を掲載しました。その後、私はそれを 1 冊の本に復刻製本して全会員に無償所配布しました。

★ 中帰連訳編「覚醒～撫順戦犯管理所の 6 年」～これは、撫順市文史委員会が元管理所職員の手記や口述を編纂した「世界を震撼させた奇蹟」を、会が翻訳し、編集して、平成 7 年 4 月に表記の表題で大阪の「新風書房」より出版しました。私も 3 名の編集出版委員となり、1 冊のワープロ本を作成して中国に送りその検閲を受けました。

★ 中帰連編「私たちは中国でなにをしたか」の復刻～前記の本と同時に、会は「新風書房」より絶版になっていたこの本を再出版しました。これで管理所における管理者と被管理者両者の手記が出そろい、われわれを「洗脳分子」呼ばりする反動勢力への打撃を強めることになりました。

★ 中帰連編「帰ってきた戦犯た

ちの後半生～中国帰連絡会の40年」～わが会の歴史を書き残そうという企画は、統一以前からあり、平成5年「中帰連40年史編集委員会」の誕生により現実化しましたが、最終的には私を長とする沢田二郎、高橋哲郎の3名で作る編集出版委員会に任されました。

検討の結果、前史、分裂までを第1章、分裂後の正統の活動を第2章、分裂後の中連の活動を第3章、統一後の活動を第4章の構成とし、前史を沢田二郎、各章は、それぞれの責任者である国友俊太郎、富永正三、絵鳩毅が執筆しました。私はその原稿のすべてを2年がかりでワープロ印字して出版社に渡し、平成9年4月の「中帰連帰国40周年記念式典」に「新風書房」から発行されました。これは本文780頁、付録104頁の大冊となり、発売価格5,000円です。

★ 季刊誌「中帰連」の発行～平成9年6月、会は年4回発行の季刊誌「中帰連」の発行に踏み切りました。この季刊誌の発行は、常任委員の三尾豊らが中心となって企画し、会に持ちこんだものですが、会は全国大会でこれを会の重点活動事業として取りあげることになりました。

編集委員長に推薦された私は、創刊号は「日本は中国で何をしたか」として、会員の手記を収録して侵略戦争の実態を暴きましたが、大きな反響を呼ぶことができました。「朝日新聞」はじめ地方の新聞紙上に取りあげられ、会の事務所の電話はしばらくの間、鳴り放しでした。

以後、私は各号のテーマとその掲載内容を2ヶ月前の常任委員会に発

表して了解を得た後、さらに編集委員会で検討したうえ決定してきました。だが、その第7号の編集委員会の席上で、私を憤激させる一件があり、この編集長も、また会の常任委員長も辞任することを決意しました。

だが、辞表提出後から会が解散するまでの4年間、私は会員としての活動は放棄しませんでした。



(V)「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」の特別会員として

～89歳～98歳の現在まで～

平成14年4月会が高齢のため解散するや、会の意志と活動を受け継ぐ会＝「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」が誕生しましたので、私はその特別会員となり、引続き活動させていただいております。

① 執筆活動～この時期は、以前に比べて自由時間が多くなったので、日々の生活は、パソコンによる執筆活動となりました。この時期に作成した未発表の自製本は、日記、雑記帖、歌集、句集など16冊でした。とくに昨年は「撫順の奇蹟を受け継ぐ会・神奈川支部」のご援助により、2冊の小冊子「撫順戦犯管理所の6年」と「シベリア抑留の5年」とを発行させていただききした。そして本日、第3作目「皇宮兵士の4年」を発刊することができました。

また、雑誌「中帰連」、同人誌「白壁」をはじめ、諸雑誌に求められて

投稿した戦争体験記などは、17編でした。

② マスコミ等の取材に応える～また私は、NHK、BBC放送局、北京中央放送局、TBS放送局、ポーランド中央ラジオ局、フランス中央ラジオ局、朝日新聞社等々のスコミや個人からの取材を受け、侵略戦争の実態、自己の犯した戦争犯罪、中国で受けた人道的待遇などを語りました。この回数は、合計25回ほどになりました。

③戦争証言活動～だが、この期間での生活の中心は、やはり戦争証言活動でした。この間私は、東京大学、早稲田大学を初め10の大学、高校、中学校各1校に対して、合計22回実施しました。また民主団体では、

「撫順の奇蹟を受け継ぐ会・神奈川支部」、「神奈川歴史教育を考える会」をはじめ、24団で実施し、前者と合わせると46回になります。

これらのなかで、最も多い会場での参加者は600名、最も少ない会場では10余名でありましたが、いずれの会場でも、皆真剣に耳を傾けていただき、私に大きな感動を与えてくださいました。また、多くの平和の活動家を友人に持つこともできました。誠に感謝に堪えません。この証言活動こそが、私の後半生に与えられた戦争責任であるとともに、また私の生甲斐でもありますので、これからも、足で歩ける限り、この活動をつづけていきたいと思っています。

おわりに

昔、アンデルセンは、こう言ったそうです。「すべての人間の一生は、神の手によって書かれたお伽噺に過ぎない」と。私の波乱万丈の人生を省みると、確かにそうとも思われます。だが、私の人生を狂わせた日中戦争は、神の手によって書かれたお噺などではなくではなく、人間の手、天皇制国家の権力者たちの手によって創りだされた地獄でした。

人間一人の命を奪うことは、許されない重犯罪です。ましてや、何百万、何千万の人命を奪う侵略戦争が赦されてよいはずがありません。戦争で巨利を貪る者は一握りの巨大資本家であり、戦争で破滅させられる者は勤労者です。世界60億の勤労者が等しく願うものは平和ですから、平和を護る活動こそが正義です。

ゆえに、日本国民は、まず過去の戦争へ非を認め世界に謝罪する政府、そして現在の平和憲法を飽くまで守り抜く政府、をそのような政府を樹立すべきでありましょう。これこそが、日本国民に課せられた戦争責任であり、この責任を果たして初めて、日本は世界の孤児から脱却することができ、真に平和な新しい世紀が誕生するでありましょう。時代の良心である皆様方のますますのご健闘と「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」のますますの発展とを祝福し、私のつたない活動報告を終わります。ご清聴有難うございました。

(2011年9月25日・横浜証言集会にて)